

宗教学名著選【全6巻】

- ◎ 体裁：A5判上製カバー装
- ◎ 本文13Q一段組
- ◎ 装丁：山田英春
- ◎ 各巻予価：本体5000円＋6000円＋税
- ◎ 2014年度完結予定

第1回配本

第1巻

ミルチャ・エリアーデ

アルカイック宗教論集——ルーマネ・南アメリカ・オーストラリア

ISBN:978-4-336-05688-7

2013年8月発売予定

予価：本体5000円＋税

【本シリーズの特色】

● 宗教学という学問を作り上げた五人の最重要文献を翻訳。

● 宗教学が誕生したときの姿をみる。

※ エリアーデ、ハイラー、ベッタツツオーニは本邦初訳

※ タイラーは初の完訳

※ マックス・ミュラーは最重要文献をすべて収録（本邦初訳を含む）

● 各巻に、内容をより理解するための「解題」、

さらに、当該書の現代的意義を説き明かす「解説」を収録。

● 文化人類学、民俗学、神学、仏教学、哲学、文学、

芸術などの諸分野を射程に収める内容。

● 各巻に索引を付す。

近世宗教学が誕生した19世紀後半以降、我々は「宗教」という言葉で何を掴もうとしたのか。そしてその一方で、「宗教」という言葉が覆い隠してしまったものとは何か。

19世紀後半から20世紀半ばにかけて「近代的宗教概念」を成立させた最重要文献の中から、その重要性を認められながらも未訳であったもの、

翻訳が存在するが抄訳、重訳であったものをすべて新たに訳し下ろし収録する。「宗教」という言葉そのものの再考をせまる大叢書。

◆ 編集委員 ◆

島岡進
鶴岡賀雄
山中弘
松村一男
深澤英隆
奥山倫明
江川純一

◆ 企画協力 ◆

南山宗教文化研究所

宗教学名著選【全6巻】

国書刊行会

国書刊行会 〒174-0056 東京都板橋区志村1-13-15 Tel.03-5970-7421 Fax.03-5970-7427
http://www.kokusho.co.jp e-mail:sales@kokusho.co.jp

帖合・書店印

国書刊行会

宗教学名著選【全6巻】の定期購読を予約します。

申込書

お名前

ご住所

お電話番号

※必要事項をご記入のうえ、書店へお渡しく下さい。

宗教学の基礎的な概念が検討し直されている。たとえば「宗教」という語はどのような歴史的由来をもつのか。比較の基礎概念として妥当なのか。19世紀から20世紀の中葉にかけての宗教学の歴史を振り返り、その狭さを超えていこうとの主張がさかんになされている。それはそれで意義深いものだが、そうした「宗教学批判」の前提として宗教学の古典的著作の重要性もまた再認識されている。歴史的な限界をもった諸著作であるのは当然だが、そのことを踏まえた上で、近代宗教学から学ぶべきだ。近年は新たに強くそう意識されるようになってきている。

宗教学の古典的な著作でこれまで日本語に翻訳されていなかったものが、この度、翻訳刊行されることになった。たとえば、エドワード・タイラーの『原始文化』は宗教学人類学という学術分野を確立させた著作であり、「アニミズム」という学術用語を創出した著作でもあるが、これまで抄訳しかなかった。「アニミズム」という語は頻繁に用いられているのだが、その学術的な基礎はよく分からないままに使わざるをえなかった人も多かった。「アニミズム」説に対抗する重要な学説が「最高存在」説だが、その巨頭、ヘッタツツオーニの主著も初めて日本語で読めるようになる。エリアーデはこの著作に多くを負っているのだが、そのエリアーデの重要な著作も読みやすくなる。マックス・ミュラーやハイラーの、ある時代に大きな影響力をもった著作も含まれている。

グローバル化が進み近代文明の限界の認識が深まる21世紀、宗教学の役割はますます増大するだろう。諸宗教の比較が進まざるをえない宗教状況が存在した東アジア、その中で近代化に比較的早くから取り組んで来た日本で、今後、宗教学はどのような道を歩んで行くべきか。この翻訳シリーズがそこいくつかの光を投じることができれば幸いだ。

編集委員を代表して

(上智大学教授・グリーフェケ研究所所長) 高蘭 進

編集委員略歴

高蘭 進 (しまの・すすむ)

上智大学教授・グリーフェケ研究所所長。主な著書に『日本人の死生観を読む』(朝日新聞出版、2012年)、『現代宗教とスピリチュアリティ』(弘文堂、2012年)、『つくられた放射線「安全」論』(河出書房新社、2013年)など。

鶴岡賀雄 (つるおか・よしお)

東京大学大学院人文社会系研究科教授。主な著書に『十字架のヨハネ研究』(創文社、2000年)、『スピリチュアリティの宗教史 上下』(共編著、リトン、2010—2012年)。翻訳書にミルチャ・エリアーデ『世界宗教史 5・6』(ちくま学芸文庫、2000年)など。

山中 弘 (やまなか・ひろし)

筑波大学大学院人文社会科学系研究科教授。主な著書に『イギリス・メソジズム研究』(ヨルダン社、1990年)、『宗教とナショナリズム』(世界思想社、1997年)、『宗教とツーリズム』(世界思想社、2012年)など。

松村一男 (まつむら・かずお)

和光大学表現学部教授。主な著書に『神話思考1』(言叢社、2010年)、『神話学講義』(角川学芸出版、1999年)、『女神の神話学』(平凡社、1999年)など。

深澤英隆 (ふかさわ・ひでたか)

一橋大学大学院社会学研究科教授。主な著書に『啓蒙と霊性』(岩波書店、2006年)、『スピリチュアリティの宗教史』(共編著、リトン、2010—11年)、『近代日本における知識人と宗教——姉崎正治の軌跡』(共編著、東京堂出版、2002年)など。

奥山倫明 (おくやま・みちあき)

南山大学教授・南山宗教文化研究所所長。主な著書に『エリアーデ宗教学の展開——比較・歴史・解釈』(刀水書房、2000年)。翻訳書にミルチャ・エリアーデ『象徴と芸術の宗教学』(作品社、2005年)、マーク・C・テイラー編『宗教学必須用語22』(監訳、刀水書房、2008年)など。

江川純一 (えがわ・じゅんいち)

東京大学大学院人文社会系研究科研究員。主な著書に『イタリア宗教史の誕生——ベッタツツオーニの宗教論とそのコンテクスト——』(博士論文、2009年、2013年刊行予定)、『ファシズム期のイタリア宗教史学——民族学、フォークロアの流れのなかで——』(竹沢尚一郎編『宗教とファシズム』所収、水声社、2010年)。翻訳書にマルセル・モース『贈与論』(共訳、ちくま学芸文庫、2009年)など。

ミルチャ・エリアーデ

アルカイック宗教論集

— ルーマニア・南アメリカ・オーストラリア

●監修▼奥山倫明 ●翻訳▼飯嶋秀治、奥山史亮

『再統合の神話』(一九四一年)

『棟梁マノーレ伝説の注解』(一九四二年)

『オーストラリアの宗教』(一九六六—一九六八年)

『南アメリカの高神』(一九六九—一九七一年)



*「」は原著が単行本だったものを、「」は論文だったものを意味する。

20世紀後半の宗教学をリードしたルーマニア出身の宗教学者・作家、ミルチャ・エリアーデ(一九〇七—一九八六)。第二次大戦後のパリでの出版活動を引きつかけに、広く世界中に知られるようになるその学問は、一九三〇年代に準備されていた。本巻では、のちの彼の学問につながる初期の小著二篇をルーマニア語から訳出するのに加え、晩年の集大成『世界宗教史』の執筆の直前まで彼が取り組んでいた、オーストラリアと南米の「未開」宗教についての研究成果を収録。

ISBN:978-4-336-05688-7



フリードリヒ・マックス・ミュラー

比較宗教学の誕生——宗教・神話・仏教

●監修▼松村一男、下山正弘 ●翻訳▼山田仁史、久保田浩、日野慧蓮

『比較神話学』(一八五六年)

『宗教学概論』(一八七三年)

『宗教学論集』序文(ドイツ人工房からの削り屑、第一巻)(一八六七年)

『神話の哲学について』(一八七一年)

『仏教』(一八六二年)

『仏教徒の巡礼者たち』(一八五七年)

『涅槃の意味』(一八五七年)

『仏教の虚無主義について』(一八六九年)

タイラーと並び近代宗教学の祖とされるマックス・ミュラー(一八二二—一九〇〇)は、言語学的知見に基づいて比較宗教学を構想した。『宗教学概論』は宗教学の学徒が常に参照すべき文献としてあまりにも有名。その他、神話研究の古典である『比較神話学』、当時の東洋研究の水準を示す仏教関係の諸論文を収録。

ISBN:978-4-336-05689-4

『起源の宗教学』の可能性

文芸評論家・多摩美術大学准教授 安藤礼二

宗教学が生み落とされたのは19世紀後半のことである。それまで人々は個別の世界に生きていた。しかし産業革命と資本主義の興隆は、否応なく世界を一つにしてしまった。ヨーロッパの人々は、自分たちとは異なった世界観を抱き続けてきた人々と出会った。その出会いは一つの方向性に固定されたものではなく、柔軟な双方向性を持つものだった。人間は集団の中に生まれ、可視の現実世界だけではなく不可視の超現実世界を生きている。宗教学は近代を条件としながらも、人間にとつての「普遍」を射程に収める。超現実世界は、超越的な「神」と内在的な「魂」の間にひらかれている。近代が一つの臨界を迎えようとしている今こそ、自然と文化の関係をはじめて普遍という地平から問うた「起源の宗教学」の可能性が検討されなければならない。その最良の素材が生きた日本語で提供されるのである。貴重な研究成果であると同時に、われわれ自身を知るために不可欠となる一連の書物である。

現代社会の本質を理解する鍵

社会学者 大澤真幸

現代社会の本質を理解するための鍵は「宗教」にある。オウム事件や9・11テロやパレスチナ紛争が宗教的な問題であることは、言うまでもないが、宗教的な現象は、このようにあからさまな例に尽きるものではない。EUの統一がどうして可能だったのか、われわれはどうして「核」に執着してきたのか、われわれが資本主義というゲームから降りることができないのはなぜなのか、という主題はすべて宗教に関わる問いである。生命への人為的な介入はどこまで許されるのか、地球生態系の存続のためにいかにして将来世代と連帯するのかという実践的な課題も、宗教的な想像力の助けなしには対応できない。だが、伝統的に世界宗教の真空地帯にあった日本人は、宗教を理解するのが著しく苦手である。

ところで、人類の知の歴史のどのような必然性によるのか、宗教をめぐる真に深く包括的な探究は、19世紀末から20世紀の前半の西洋に集中的に現れた。だが、その中の重要ないくつかは、これまで日本語で読むことはかなわなかった。だから、このシリーズ『宗教学名著選』の意義は大きい。現代を、その基盤から、長期的な視野の中で理解したい人は、このシリーズを読むとよい。そして宗教とは何かを知るとよい。

宗教ラビリンズへの先達

浄土真宗本願寺派如来寺住職・相愛大学教授 釈徹宗

宗教を知らずして人間はわからない。それは私自

神の全知——宗教学論集



監修 鶴岡賀雄 ●翻訳 江川純一

第一部

『最初の宗教における最高存在』（一九五七年）

第二部

▼「一神教」/多神教論

「一神教と多神教」（一九三〇年）

「一神教」と「多神教」について（一九四六年）

「一神教の形成」（一九五〇年）

▼神話論

「神話の真理」（一九四八年）

「創造の神話と神話の創造」（一九五二年）

▼宗教学方法論

「宗教学における歴史と現象学」（一九五四年）

「比較方法」（一九五九年）



ラッファエーレ・ベッタツツオーニ（一八八三—一九五九）はイタリア最初の宗教学者にして、この分野においてエリアーデと並ぶ20世紀最高の碩学として知られる。エリアーデ自身ベッタツツオーニに教えを請うかたちで宗教学の研究を始めた。第一部はベッタツツオーニが最後に刊行した著作。地理的・社会的環境が神の表象にどのような影響を与えるかという視点から、遊牧民・狩猟民、農耕民における神の基本的な形態とその属性を分析。第二部として論文七点を収録する。

ISBN:978-4-336-05690-0

第4巻

フリードリヒ・ハイラー



祈り

監修 深澤英隆 ●翻訳 宮嶋俊一

フリードリヒ・ハイラー（一八九二—一九六七）による『祈り』（一九一九年刊）は、祈りの宗教学的研究の古典として名高い文献であり、祈りに関する研究で本書に言及していないものは皆無と言っても過言ではない。本書はこれまで英語を始め世界各国語に翻訳されてきた。このたびの邦訳により、名著の全体像が明らかになる。わが国における「祈り」研究の礎石となることが期待される。

ISBN:978-4-336-05691-7

第5巻 第6巻

エドワード・B・タイラー

原始文化（上・下）

監修 松村一男 ●翻訳 長谷千代子、堀雅彦



現在、広範に使用されている「アニミズム」という語は、タイラー（一八三二—一九一七）に由来するが、本書（一八七一年刊）とマックス・ミュラーの『宗教学入門』は近代宗教学の二つの源泉といえる。本書は、宗教の起源とその発展を一つのパースペクティヴに取めた画期的な研究であり、「金枝篇」で知られるフレイザーに多大な影響を与えた名著。宗教進化主義の枠内で語られることの多いタイラーだが、彼の学問はその枠内に収まるものではない。今回の翻訳によりその全貌が明らかになる。

5巻 ISBN:978-4-336-05692-4 9巻 ISBN:978-4-336-05742-6

身の実感である。しかし、宗教の領域は深く考察すればするほど正体が見えなくなる。これもまた自分自身の実感である。

宗教というラビリンスへと足を踏み入れる時、今回の『宗教学名著選』は先達の役目を果たしてくれるはずだ。「聖なるもの」や「シャーマニズム」などの研究で一時代を画したミルチヤ・エリアーデ。比較宗教学の領域を切り開いたミュラー。人類という巨視的な眼から宗教を俯瞰したタイラー。エリアーデに影響を与えたベッタツツオーニ。そして初の邦訳であるハイラーの『祈り』。本シリーズの各著作なしに今日の宗教学は成り立たない。

宗教を知ると、何かの結び目がほぐれる。なぜなら、宗教の構造は人間や社会の根源的な仕組みとパラレルだからである。人間や社会の根源的な仕組みは、何万年も変わっていない。宗教というヌエのような領域に肉薄することで、人間がいとしくなる。それもまた、多くの宗教研究者の実感なのである。

錯綜した現代を照らすカギ

社会学者 橋爪大三郎

19世紀から20世紀にかけて、ヨーロッパで「宗教学」が興ったには理由があった。キリスト教文明の国々が世界に進出し、イスラム文明やインド文明や中国文明や発展途上の世界を支配下に収め、植民地化したからだ。キリスト教を相対化するには、その上位概念である「宗教」の観念が必要だった。

「逆の学」である「宗教学」は、わが国にすんなり受け入れられた。キリスト教を相対化するのには、当然だったからだ。ただしその切迫した問題意識は、薄められてしまった。

グローバル化の大波を浴びつつあるいま、改めて宗教学の名著がよみがえることは喜ばしい。さまざまな文明における宗教のあり方は、人間社会がらむ意味と価値の深部に届いている。宗教学はそれを、断層撮影のようにあぶりだす、合理的で体系的な武器なのだから。錯綜した現代を歩む人類社会の、いまを照らすカギが手に入ることを期待したい。

人類の営みと試みの原点へ

福井大学研究所所長 松岡正剛

信仰と宗教と宗教学は少しずつ異なるものだが、その底流に流れている方向や質はほぼ同じものである。そこには今日のわれわれがいまなお懐中に抱く敬虔と畏怖と懐疑が息づいている。

人類がダブル・ブレイン（両脳）とバイカメラル・マインド（二重心）をもったとき、うつすらと「神」や「超越者」が想定された。以来、集住と生死と言語活動と自然恐怖が何百年にもわたって繰り返されるなか、原始文化・古代文化とそこに揺籃期の宗教が組み上がっていったわけである。そこにはアニミズム、シャーマニズム、トーテム、アイコン、タブーその他の、その後の確立宗教の構成因子の大半がひそんでいた。

このシリーズは、そうした信仰と宗教の流れを原点にさかのぼって議論した宗教学の名著中の名著を厳選して提供する。人類の営みの最も重要な試みに分け入ったこれらの名著には、今日のわれわれが見忘れてはならない示唆が満載されている。